【ポスター発表】

障害学生の高等教育進学プロセスに関する質的分析

－発達障害者を対象とするインタビュー調査から－

滋賀大学　　堀　兼大朗（009939）

キーワード３つ：発達障害者、高等教育進学、SCAT

１．研 究 目 的

日本学生支援機構（2023）が高等教育機関を対象に実施する継続調査によると、令和 4 年度は大学、大学院、短期大学、高等専門学校に在籍する障害学生数は 49,672 人となり、障害学生数はこの 10 年間で約 5 倍増えた。大学に在籍する障害学生数は 44,448 人に上り、障害種別で見ると精神障害と発達障害が多く、前者は 14,903 人、後者は 8,811 人となる。

では、高等教育に進んだ障害者はどのような経緯で進学を選んだのか。この問いに迫る研究は、今日の障害者の進路選択の内実を把握でき、さらには障害学生に対する教職員の理解や障害学生支援にとって参考となる知見を提示できるはずである。とくに近年は発達障害者の増加傾向に伴い、発達障害学生への支援に対する関心が高まりを見せている（三島 2015)。そこで本発表では、高等教育を受ける障害学生の多くを占める発達障害のある大学生を対象とし、本人の大学進学のプロセスをインタビュー調査から明らかにする。

２．研究の視点および方法

日本の中核市にある 2 つの発達障害者の親の会でインタビュー調査を実施した。調査期間は 2022 年 1 月から 2023 年 10 月である。対象は大学進学を経験した自閉症者 8 人である（7 人が大学生、1 人が大卒 1 年目)。インタビューは半構造化形式であり、大学進学理由と、小学生の頃から高校 3 年生の進路選択時に至るまでのライフヒストリーを尋ねた。

コーディングを行うため、大谷 (2011) による SCAT (Steps for Coding and Theorization) の手法を用いて、逐語化したインタビュー・データの中から進学理由に関する語りに SCAT（4 つのコーディングのステップ）を実施した。SCAT により、語りには進学理由を含む様々な概念が多様かつ重層的に含まれていることが確認された。そのため、各概念をサブ・カテゴリでまとめ直し、そのサブ・カテゴリをカテゴリに大別した。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理規程に従っており、2021 年 10 月に上記の親の会の集会で調査目的、調査方法、録音の許可、調査協力および回答の拒否権、個人情報の取り扱い、学術研究でのデータ使用について会員の母親に文書と口頭で説明し、母親からそれらの事項を子（自閉症者）に伝えてもらうことで協力を依頼した。インタビュー前にはそれらの事項を再度説明した。また、滋賀大学の倫理審査委員会で調査内容の承認を得た（承認番号：B240002)。本発表に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。

４．研 究 結 果

進学理由に関する概念整理の結果を説明する。【　】がカテゴリ、〈　〉がサブ・カテゴリである。4 名の対象者が【障害者であることの引け目】を感じていた。不得手や失敗経験から〈自身の自分の能力に対する否定的な省察〉を行う者や、疲れやすさや倦怠感が生じやすい障害特性から〈自身の不調を踏まえた働くことの難しさ〉を感じる者、これまで障害に関する苦労を経験していない一方で〈スティグマの感受〉のみを経験する者がいた。また、進路選択時に【親の関与】を語る者が 2 名いた。1 人は〈所属クラスを踏まえた親の進学期待〉を向けられていた。もう 1 人には得意分野があり、その分野を大学で学ぶことを親に勧められたケース、すなわち〈親の進学期待と本人の利害の一致〉が起きていた。進学理由に関しては次の 2 つのカテゴリに大別された。5 名が【障害者であることを踏まえた進学】を語っており、先の〈自身の自分の能力に対する否定的な省察〉をしていた者は、学歴によって就職をより確実なものにするため、〈就職への活路〉として進学を選択していた。また、先の〈自身の不調を踏まえた働くことの難しさ〉を感じる者は、不調をきたしても問題にならない〈学生身分による容認の獲得〉のために進学を選んでいた。そして、先の〈スティグマの感受〉のみを経験していた者は、健常者の多くが進む大学に行くことで、〈健常者という立場への接近〉を企図していた。加えて、3 名が【一般的な進学】理由を語っていた。進学クラスの所属から〈進学意欲〉を形成していた者、自身の得意分野や興味関心に基づく〈自己実現〉を果たすために進学を希望する者がいた。

５．考 察

対象者の大学進学選択には、進学クラスの所属や自己実現などの一般的な進学理由が観察される一方、障害特性の生きづらさやスティグマといった障害者固有の進学理由も見出された。後者の理由からは本人が障害者に対する否定的なまなざしを感じながら学生生活を送っていることが示唆され、学生支援でもそうした感情を汲み取る必要があると考える。

付記

本研究は科学研究費助成事業（23K12616）の成果の一部です。

文献一覧

独立行政法人日本学生支援機構，2023,「障害のある学生の修学支援に関する実態調査」，独立行政法人日本学生支援機構ホームページ，（2024 年 1 月 27 日取得，www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/index.html）.

三島亜紀子，2015,「ケンブリッジ大学・障害学生支援センター訪問－学生 10 人に 1 人が障害学生（発達障害を含む）という状況が日本の大学に問いかけるもの」『社会福祉学』56(1),141-152.

大谷尚，2011,「SCAT: Steps for Coding and Theorization－明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』10(3),155-160.